

古庭園の植栽に関する研究(1)

—護念寺庭園を中心として—

義内捷之

はじめに

兵庫県下には京都の名園にない別の良さを持つ古庭園がある。それら数々の地方庭園も管理が十分でないので荒廃したり、改造されているものもいくつかある。

このような価値ある庭園は未だに二、三を除いてほとんど紹介されていない。そこで兵庫の名園の一つとして護念寺庭園の植栽について主に明らかにしたい。この護念寺は浄土宗西山派で昌利山といい、朝来郡和田山町玉置で、本庭は敷地面積 212㎡の池庭をなし、池の面積はそのうち25.6㎡を占める。この附近に本庭に類似した永田邸古茂池庵(朝来郡山東町古茂池)が残っており、滝石組、護岸石組は傑出していて、この庭は本庭と共に江戸時代のものと考えられる。

さて自然林の植生については当生物学会でも報告にたびたび接することができる。しかし、かかる自然林の中に育まれて来た庭園植栽についてはまだ調査発表の例を

見ない。そこで社寺庭園の植栽について実測調査のうえ第1報をまとめたい。

その主題は、次の点にしばられる。

1. 自然植生と庭園植栽すなわち鑑賞用という cultivated plant との相違性。
2. 庭園植栽での実用性。

なお本庭園研究に当たり、豊富な庭園史学の知識の一端を示して下さった西桂氏(兵庫県立農業高等学校勤務)、実測に参画していただいた近畿大学農学部第1回生在学中の山下昌宏氏、ならびに兵庫県立農業高等学校造園科第3学年在学中の中道徹君の皆さんには心からの感謝の意を表します。

この研究が大自然の営みと人間の生活環境との接点に設けられた庭園という場に植栽された植物を理解する一助となれば幸である。

護念寺庭園実測図

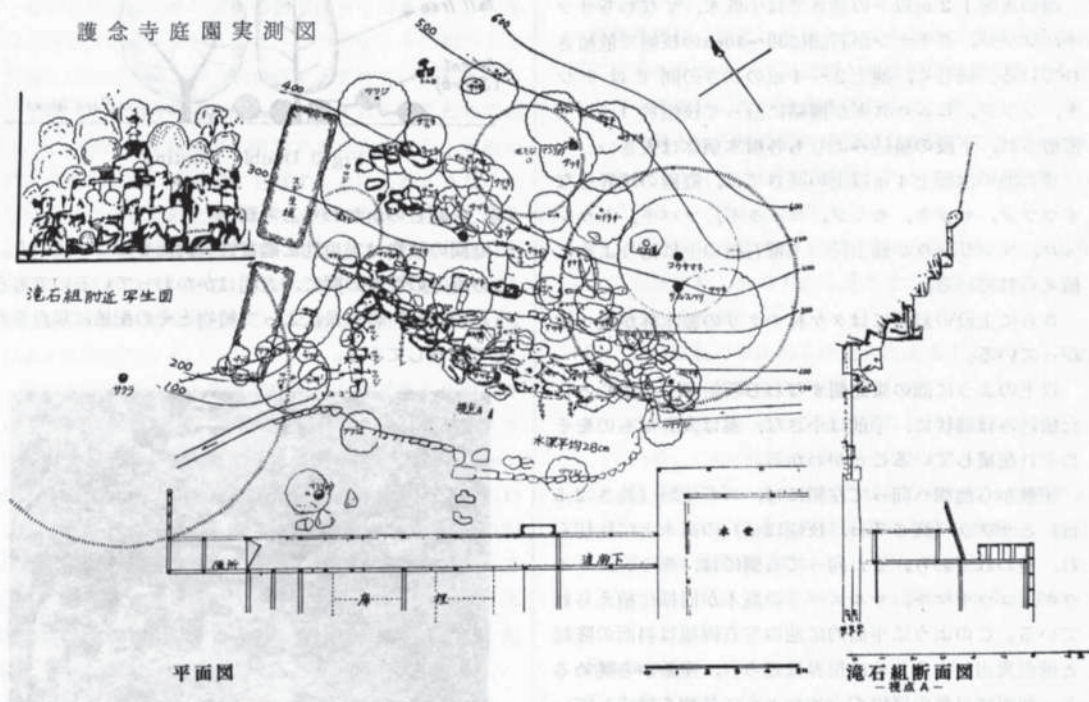


Fig-1 The Survey Map of Gonenji Temple Garden.

1974:4

1 庭園構成について

中央に三段式滝石組のある池庭で座敷より眺めるつくりになっており、護岸石組が七重八重に段層を作り屏風を上げたようになっている。裏山はクリと雑木林、竹林となり、岩間の Rhododendron 類は、裏山と石組と池をまろやかに結びつける役目をしている。その層状の石組の中に所どころ立石と石灯笼が雰囲気を引きしめている。

滝石組については、水落石は上から三石で0.25トン、0.1トン、0.2トンと小振りではあるが、奥行きのある構成となり、滝副石は0.98トン、0.79トン、1.28トン、0.3トンのような大石で、水落石を抱くように景趣のポイントとなっている。また池面の上には0.3トンの水分石がその滝石組を支えるように浮かんでいる。

また滝石組に連なる石組はまるで石階段のように斜面を等高線に沿って配石されている。そのいろいろな石組の上に（池面高3m付近に）園路が通っている。（Fig.-1）

2 庭園における植物の配植

(1) 平面的配植

本堂の廊下、渡廊下、座敷から人が庭の植込みを觀賞できるように植えている。池の西南部すなわち座敷（庫裡）側にはほとんど目を遮る植物を植栽せず、池の東北側すなわち石組部分を中心として、池をとりまくように植込みが続く。

池の水面上2m以下の高さでは小低木、すなわちサツキ、ツツジ、クチナシが石間に30~40cmの枝幅で散植されている。同じく、池上2~4mの高さの間ではサツキ、ツツジ、ヒムロスギが園路に沿って枝幅約1.5mで密植され、下段の植込みよりも各樹木個体は大きい。

また池の水面上4m以上の高さでは、庭園の境界をなすツツジ、サツキ、モミジ、ヒイラギ、ツバキ、トウシユロ、マンリョウが最上段の土留石組の上に沿うように植えられている。

さらに上段の斜面にはタケ林やクリの雑木林が奥へ広がっている。

以上のように池の東北側すなわち石組部分を中心とした植込みは層状に、手前は小さな、奥は大きなものをそれぞれ配植していることがわかる。

座敷から池側へ向って左側には、スギ生垣（高さ2.5m）とサクラ（高さ7m、枝幅12m）の高木とに仕切られ、被われており、また向って右側には、モミジ、ヒイラギ、コウヤマキ、サルスベリの高木が同様に植えられている。このように平面的に池の左右両端は斜面の隆起と前面突出しとのために視界は遮られ、座敷から眺めると、前面に自然の屏風を立てたように景観を構成している。

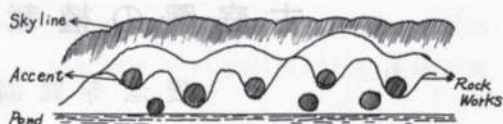


Fig-2 Simple Planting

(2) 立面的配植

座敷から池の方へ正面向いの立面的配植の景観は、Fig-2 に示すように単層植栽である。これは、一段植栽ともいい、一重垣や植込みなどに普通に見られるが、本庭の場合、石組が層状をなして迫り上っており、それに応じて石と石の間に Rhododendron 類がアクセントとして単層に植込まれている。したがって、最上段の石組を被っているその植込みは、スカイラインを形成すべきものであろう。ただし正確には、さらにその上方には竹林やクリなどの雑木林が天然のスカイラインを構成していることはいうまでもない。

また、同じ位置から側面的配植、例えば向って右側の配植景観は、Fig-3 に示すように二段植栽である。これは上木と下木の二段植栽で、低木の Rhododendron 類のアクセントの上に、モミジ、ヒイラギ、コウヤマキ、サルスベリが上木として植えられ、雰囲気を奥深いものにしていく。



Fig-3 Double Planting

(3) 人間とのかかわりと考察

庭園の植物は実用性と鑑賞性の両面をになっている。この両方の性質の間に、人間はかかわっているのであろう。Photo-1 の全景によって植物とその配植に焦点を当てて考察してみる。



Photo-1 Whole view of Gonenji Temple Garden.



Photo-2 The waterfall in the garden, cascading in the falls.

まず本庭園の配植の実用的側面はどうであろうか。かなり急斜面に石組みがなされ、そのポケットに相当する部分に *Rhododendron* 類が植え込まれていることについては、裏山からの出水による土くずれを防ぐためである。この種類は半陰地でも陽地でもよく生育し、細根の発生が多いため、傾斜地にも適するといえる。またこれらは低木であるため大きくなり過ぎて根元や枝振を乱すことなく、少くとも寿命の50~60年間はほぼ同じ姿を刈込むことにより生かせる。同時にあらかじめ樹木である *Rhododendron* 類を植込むことにより、雑草が繁茂しないように管理できる。

次に本庭園の配植と鑑賞的側面はどうであろうか。サルズベリ、サツキ、ツツジ、クチナシ、ツバキ、サクラなど四季の花ものを鑑賞できる植物が多い。*Rhododendron* 類の低木は斜面の石組を根締めにし、景趣をやわらげ、それらはきちんと刈込みがなされている。その刈込みは偏奇性の樹形に整枝され、座敷から人が見上げて植込みが石の間に正面に眺められるように、いわば「半懸崖」になるように *Rhododendron* 類を刈込んで、配植していることがわかる。

なお、森林内の林相は風致的に考えて30年たてばまったく一変するのが林学の常識である。同じことがまた本

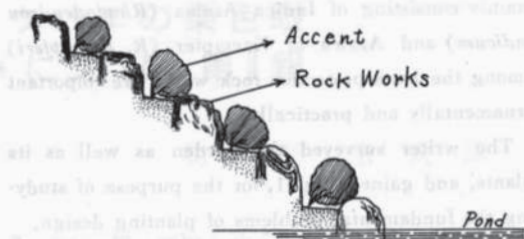


Fig-4 Cross Section

庭園内の植栽にもいえる。したがって、江戸時代の庭園だから過去の樹木が残っていると考えるよりも、築庭当時の植栽はもはや失なわれていると考える方が自然である。もしあったにしても、おそらく残っていないであろう。それ故に実用的にも鑑賞的にも人の手が加わった庭園植物を検討しているのは、その今日性においてである。過去から現在までの植栽にまつわる人間とのかかわりが浮き上がってくるのはこのためである。地形を最大限に利用する残山剩水という思想は室町時代にまでさかのぼって現在まで続き、植栽は植物の生長をできるだけ抑える（今でいう）刈込み、すなわち「籠（こみ）」という手法も同時代に完成し、わが国の風土になじみ定着している。

まさに本庭園はこの低木の刈込みの妙味を最大限に生かしている好例といえないであろうか。

まとめ

護念寺庭園の植栽は池をとりまくように護岸石組の石間に生えるサツキ、ツツジ類が鑑賞的にも実用的にも主体となっており、次の諸点を明らかにした。

1. 幾層もの石組の間に単層植栽が続いてアクセントとなり、背景では同じ植栽がスカイラインを構成している。(Fig-2 参照)
2. 単層植栽の低木は「半懸崖」の偏奇性になるように刈込まれ、池の下から見やすく整姿されている。(Fig-4 参照)
3. この植栽は裏山からの出水による土くずれ、石組のゆるみ、雑草繁茂を防いでいる。
4. この植栽は石組の根締めとなり、景趣をやわらげている。この各枝幅は30cm~150cmである。
5. 池左前方のスギの生垣と右前方のコウヤマキおよびサルズベリの高木とは風景の両端を遮断し、独立した空間を構成している。(Fig-3 参照)

(昭和49年7月1日)

Summary

The planting of *Gonenji Temple*, which is famous for the ancient style pond garden in Yedo Period,

mainly consisting of Indica Azalea (*Rhododendron indicum*) and Azalea of Kaempfer (*R. Kaempferi*) among the bank protection rock works are important ornamentally and practically.

The writer surveyed the garden as well as its plants, and gained Fig.-1, for the purpose of studying the fundamental problems of planting design.

The results are as follows:

1. The chain of simple plantings along a contour line stresses accents of the shrubs among rocks, and the same plantings as mentioned above composes the skylines against a backdrop of the hill. (reference to Fig.-2)
2. The shrubs of the simple planting are clipped away into the "overhanging" trained form, and makes it possible to have the easy view from the down side of the pond. (reference to Fig.-4)
3. Such kind of plantings protects against water from the hill at the back, prevents from loosing

the foot of rocks, and stops the spread of weeds.

4. These plantings across to the rock works moderates the atmosphere of the garden there. Each one is (30-150) cm in branch width.
5. The hedgings of Cryptomeria (*Cryptomeria japonica*) on the left-hand side of the pond forward and the tall trees of Umbrella-pine (*Sciadopitys verticillata*) and Crape-Myrtle (*Lagerstroemia indica*) on the right-hand side make the view wonderful [by cutting off the scene, and compose the independent space in order to uniform the unique garden. (reference to Fig.-3)

参考文献

- 北村四郎・岡本省吾：原色日本樹木図鑑，保育社（1972年）
雑誌いなみ（第23号）兵庫県立農業高等学校農業クラブ 4～18頁（1974年）